

# 八百万の神に問う2

## 夏

多崎 礼

*Ray Tasaki*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 天野 英

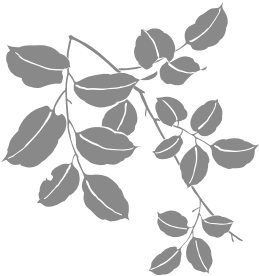


目次

序章	10
告解(一)	17
第一章	19
告解(二)	61
第二章	63
告解(三)	123
第三章	127
告解(四)	189



第四章	191
告解(五)	210
第五章	211
第六章	235
終章	248
あとがき	252



人物  
介

イロオン



エン



サヨ



登場  
紹

ミサキ



ゲン  
ドウ



ミズ  
ハ



トウ  
ロウ  
ウ



ゲ  
イ  
ル

レイ  
シャ



八百万の  
やおよろず

神に問う2  
夏

今よりはるか昔。

大地が戦乱の混沌に満ちていた頃。

北方より、神は来たりて言った。

「万物の長たる人間よ。

知恵と技を持ち、言葉を持つ者達よ。

矛を収め、隣人の声を聞け。

その嘆きに心を痛めよ。

傷つきし者に手を貸し、病める者に寄り添い、

幼き者を導き、老いた者を敬え。

愛と信仰を持つ者達よ。

互いを慈しみ、深き絆で結ばれし兄弟よ。



忘れてはならぬ。

汝が守りし者の命は汝の命である。

汝が奪いし者の命もまた汝の命である。

ゆえに正しき行いは汝の生命を磨き、その魂を輝かせる。

悪しき行いは汝の生命を曇らせ、その魂を濁らせる。

楽園へ向かう箱船。

其に乗ることが出来るのは輝く魂だけである」

その教えに従い、良き行いをした者達は、

神の御船に乗り、楽園へと導かれた。

しかし神の教えを破り、悪しき行いをした者達は、

神の御船に乗ること叶わず、暗き大地を彷徨い続けることになった。

## 序章



しつとりと濡れた若葉。幾重にも重なる万緑。ばんりよく

大地を覆う羊歯の葉に木漏れ日が斑模様を描き出す。吹き抜ける青風。さわさわと枝が揺れ、斑模様もゆらゆら揺れる。

里に俄雨を降らせた雲は常世ノ山の向こうへと流れ去った。青葉の間から見上げる空は高く澄み、どこまでも青い。

雨に濡れた大地から立ち上る熱気。腐葉と夏草と湿った土の匂い。ようやく梅雨明けを迎えた穂含月。命の息吹輝く初夏である。

すっかり葉桜となった山桜の木陰に、ヴヴンと力強い羽音が響いた。鮮やかな黄色と黒の体色。蜂だ。人の親指ほどもある大雀蜂だ。

その羽音に呼応するように覆い繁った羊歯の葉が揺れた。キジトラの毛並みをした大猫が頭をもたげる。白い鬚を蠢かし、金の瞳で雀蜂の動きを見守る。ヴヴヴ……と羽音を響かせながら、葉陰から葉陰へと大雀蜂は飛び回る。それに合わせ、大猫も右を向いたり左を向いたり忙しい。

やがて雀蜂は一段と大きな羽音を響かせ、再び空へと舞い上がった。それを見て、大猫は前足の上に顎を乗せた。安心したように目を閉じて、フウンと大きな息をつく。

「蜂が苦手か？」

その頭上から笑いを含んだ声が降ってきた。暗褐色の堅い樹皮。三つ又に別れた梅檀の幹。そこに一人の女が腰掛けている。

ゆらゆらと揺れる癖のある黒髪。不健康そうな青白い顔。くたびれた銀鼠色の上衣は露に濡れ、紺色の下衣には泥が染みついていてる。その右手に朱塗りの盃。左手には酒徳利。梅檀の幹に背中を預け、

ゆるゆると酒を飲んでゐる。

彼女の名はイーオン。字名はシン。幽世に最も近い里と呼ばれるナノ里の専属音導師であり、『その声は八魂を震わせ、その言葉は山をも動かす』と謳われる伝説の音導師である。

「リオンは蜂が大嫌いだった」

呟きながら、イーオンは盃に酒を注ぐ。

「小さい頃、養蜂の手伝いをした時、さんざんな目にあつたらしい」

一息に酒を啜る。

ぶらりと垂れ下がった左足の下。大猫は目を閉じたまま寝たふりを続けている。

薫風に、さわさわと羊歯の葉が揺れる。

ちやかちやか、ぽこぽこ、ぴーるるる……

風に乗って楽の音が聞こえてくる。

太鼓と笛の音。賑やかな三味線。陽気な歌声。

シヨウギの屋敷で祝宴が始まつたらしい。

ちやかぽこ、ちやかぽこ、ぴーるるる……

樂しげな出囃子。それに合わせ、

ちるちるちる、ちるちる

ちる、ちるちるちる、ちるるる……

聞こえる若鳥の囀りに、イーオンは顔を顰めた。

「——酷暑か」

岩や風、水や土。春の恵風や夏の灼熱。自然が象徴となる形をとつたもの。楽土で生まれ育つた久仁人達はそれを『カミ』と呼び、『可見』と書く。

だが一口に『可見』と言っても、中には姿を見せない変わりものもいる。梅雨明けとともに囀り始め、初夏の頃には美声を聞かせ、猛暑の際には蟬と張り合い、初秋を迎えると悲しげに鳴いて、落葉の頃にはぱたりと絶える。声はすれども姿は見えない。歌声が多く聞かれるほどに、その年の夏は過酷になる。

それが『酷暑の可見』である。

「暑いのは苦手なんだがな」

イーオンはほやきながら徳利を持ち上げ、盃に酒を注いだ。

その時。ガサガサと羊歯の葉をかき分け、一人の男がやってきた。丸々と肥えた腹。真ん丸な顔に薄い頭髪。ナノノ里の里長シヨウギだ。

「おや、こんなところにおったのかの」

彼は眼を細め、愛想の良い笑みを浮かべた。

「あちらで皆と一緒に飲めばよいものを。姿が見えぬゆえ、サヨ殿が心配しておられたぞよ？」

ぼったりとした手を頬に当て、うっとりとして微笑む。

「花嫁姿のサヨ殿はそれはそれは美しいぞよ。まるで春風様のような麗しさぞよ。見ておかないとソンをするぞよ？」

「考えが浅いな、シヨウギ」

イーオンは目を閉じ、ふふんと鼻で笑う。

「本当に美しいものは目に見えない。たとえ檻を著しても、年老いてしわくちやの婆になっても、

サヨ殿は美しいさ」

「それはわからいでもないがの。わしは花嫁御寮の方がいいぞよ。美しいものを愛でていると心が和んで、豊かな心持ちになれるからのう」

「大地の可見のくせに即物的だな」

「だってわかりやすいではないか」

シヨウギは子供のようにぶつくりと頬を膨らませる。その顔を見て、イーオンは苦笑した。このシヨウギを使って、本物の美について音討議をしたことを思い出す。あれは三ヶ月ほど前、桜花舞い散る苗植月のことだった。

「シヨウギ、お前達可見は不老不死であること以外に、特別な力は持たないと言ったな？」

「うむ」シヨウギはこくりと頷く。「わしらは老いることも死ぬこともない。しかしそれ以外は人と変わらぬ。イーオン殿のように話術で八魂を震わせたり、言葉で山を動かすことは出来ぬ」

「私として山は動かせない。鳥居道を破ることも、天ノ神が定めた楽土の掟を違えることも出来ない」

三つ又の幹の上でイーオンは体の向きを変え、シヨウギと向き合う。

「だが天の可見であるカンナミは、サヨ殿をナナノ里に招き入れた。一人では鳥居門をくぐれなかった彼女を真の楽土に引き入れた。これは人にはない力だ。それを行使することは、楽土の掟に反することではないのか？」

「そうはいつでもカンナミの意志は天ノ神の意志だからのう」

シヨウギは細い目をますます細める。

「もちろんわしもカンナミも自分で考え、自分で判断しておる。だがそれは八百万やおよその神が『斯くあれ』と望んだことなのだな」

「つまり八百万の神は、楽土の掟を違えてでも変化を求めたというわけだな？」

「そうなるかのう」

童わらしのような丸顔に無垢な笑みを浮かべ、シヨウギは照れたように頭を掻く。

「サヨ殿がナナノ里に来てくれたことで、里は生き返った。まるで春が来たように里人達に笑顔が戻った。それは里人達にとっても、八百万の神にとっても、喜ばしいことである？」

イーオンは答えなかった。無言で盃に酒を注ぎ、一気に呷る。空の盃をシヨウギの眼前に突きつける。

「で、その目的はなんだ？」

シヨウギはちまちまと目を瞬まばたく。

「目的、とな？」

「すべての存在は利害で動く。八百万の神にも何か思惑があるはずだ」

そう言い、イーオンは天を睨にらむ。

「楽土は悲しみや苦しみから人を解放する。人生の最後の時を豊かにし、安らかな死を約束する。その見返りに、八百万の神は何を求めらる？」

「人の幸せを願うだけではダメかのう？」

「それが八百万の神の願いなら、どうしてすべての土地を楽土と化してしまわない？」

厳しい声でイーオンは詰問する。

「楽土には記憶を改竄する力がある。ならばどうしてもすべての争いを駆逐してしまわない？　そもそも人に自我がある限り、万人が幸福に暮らす世などあり得ない。なのに八百万の神は、どうして人に自我をもたせておくんだ？」

「おお、次から次へと難しいことを訊くでない」

シヨウギは困ったように顎を搔く。

「八百万の神はの、人という生き物が好きなのだ」

「——なんだと？」

イーオンが片眉を撥ね上げた。

それを見て、シヨウギは慌てて手を振る。

「まあまあ、聞けというに」

ごほんごほんとき咳をする。

「この世のすべては調和しておる。存在するだけで価値がある。人もまた然り。迷い、戸惑い、時に愚かな真似をしたとしても、人は人であるからこそ価値がある」

イーオンはフンと鼻を鳴らした。梅檀の幹に背を預け、酒を呷る。

「人は草木のように土と水だけでは生きられない。獣のように本能の命じるままにも生きられない。人は他者を駆逐しなければ前に進めない。調和とは縁遠い性質を持った、とんでもない鬼つ子だ。それでも存在する価値があるというのか？」

「確かに人は欲を持つ。野望を抱く。そのためならば同胞も殺す。イーオン殿の言うとおり、人は世界の調和を乱す鬼つ子かも知れぬ」

そこでシヨウギは、にこりと笑った。

「だがのう、人の持つ攻撃性は向上心や好奇心の元となっておる。それがあからこそ人は海を割り、山をも動かす。激しい憎悪を抱くがゆえに、深い深い愛を育む。野心を抱くからこそ無謀な物事にも挑戦し、己の人生を切り開こうとする。このような生き物は人だけだ。人が持つ可能性はまさにこの世の至宝。何物にも代え難い」

同意を求めするように、首を傾げる。

「イーオン殿もそう思うのである？」

「——どうだかな」

惚けて盃に酒を注ごうとする。が、すでに徳利は空だった。イーオンは舌打ちすると、徳利をぽいと投げ捨てた。

「ヴニャウ！」

目の前に落ちてきた徳利に驚き、大猫が勢いよく立ち上がる。背中を逆立てて徳利を睨み、それからイーオンへと目を向ける。

「うるるる……」

抗議の唸り声を上げる大猫である。

だがイーオンはそれを無視し、三つ又から飛び降りた。梅檀の幹に預けてあった銀の音叉を手に取り、  
 椰揄するように笑う。

「一理あることは認める。が、それでは私の音叉は鳴らんぞ？」

「仕方がなかる。わしは大地の可見だもの。わしの

役目は人を笑わせることだもの」したり顔でシヨウギは言い返す。「人の八魂を共鳴させ、音叉を鳴らすはシン音導師の役目である？」

「難題は私に丸投げか」

「人の行く先のことだからの。人が考えなければ意味がない」

シヨウギは腕を組み、もっともらしく頷く。

「それにわしはイーオン殿を信じておる」

「……言ってくれる」

嘆息するようにイーオンは呟く。

「お前はとんだ曲者だな、シヨウギ」

そこへ、わあつという歓声が聞こえてきた。

やんややんやの掛け声、手拍子。賑やかな太鼓と三味線に合わせ、酔漢の歌声が聞こえてくる。

祝え、祝えよ、目出度きこの日！

飲んで歌えば極楽至極！

これぞ楽土、神の庭。あ、ソレ！

ちるる、ちるるるッ、

ぢるッ、ぢるぢるぢるッ……！

負けじと酷暑の可見が喉のどを絞る。まだ初夏ではあるけれど、その声はすでに相当暑苦しい。

「やれやれ……」

木の葉の間に煌きらめく夏空。それを見上げ、イーオンは眩まぶしそうに右目を閉じた。

「今年の夏は暑くなりそうだ」



## 告解 (一)



僕が生まれたのはオリナ地方。ヴラフオスという貧しい村でした。中でも我が家は貧しくて、父母は朝から晩まで働きづめでした。

ですから僕は幼い日の大半を祖母とともに過ごしました。僕に読み書きを教えてくれたのも祖母です。異国の血を引く彼女は、故郷に伝わる物語を聞かせてくれました。神秘的な異国の文字を描いては、それらが持つ意味を教えてくださいました。

ある日、彼女は乾いた大地に木の枝で、異国の文字を書きました。

「これはお前の名前だよ」

「ヘンな字だね」

「これで『セーラン』と読むんだよ」

それから北の空を見つめ、彼女は懐かしそうに呟つぶやきました。

「もう一度、故郷の風景が見てみたいねえ」

当時の僕は幼くて、祖母が帰りたいと願う国が、どこにあるのかも知りませんでした。それでも僕は祖母が大好きでしたから、彼女を慰めたくて、こう言いました。

「じゃあ、ボクが連れて行ってあげるよ」

「それは嬉しいねえ」

祖母は笑いました。

「楽しみにしてるよ」

その約束を叶える前に、彼女は死にました。故郷に帰ることもなく、楽園に向かう箱船に乗ることも叶わず、乾いたアルスの大地に葬ほうむられました。

僕は祖母の形見の簪かんざしを握りしめ、幼心に誓ったのです。いつか必ず祖母の国に行こう。陸を渡り、海を越え、天路あまじノ国くにに渡ろう——と。

そんな想いに応こたえるように、僕の手中で、金の

簀すいがリリンと鳴りました。鈴もついていないのに、  
二股ふたまたの柄つかに鳥の飾りがついているだけなのに、簀は  
リリン、リリンと鳴り続けました。

嘘うそではありません。

本当に鳴ったのです。

本当です、大教父様。

神に誓って本当です。

## 第一章



シン少年の朝は早い。

夜明けとともに起き出して、まずは水汲み。天気  
がよければ洗濯せんたくもしてしまう。それが終わったら庭  
で放し飼いにしているにわとり鶏達に餌をやりつつ、生み  
立ての卵を集める。天ノ高原あまからやってくる山羊飼  
いから山羊の乳を受け取り、ここでようやく朝飯だ。  
彼が暮らすのはナノ里さとの東の外れ。専属音導師せんじゆおんどうし  
の屋敷だ。その土間に足を踏み入れ、鼻から息を吸  
ってみる。朝の空気はひんやりとして、炭と薪まきと湿  
った土間の匂いがある。

どうやらアレはまだ寝ているらしい。

そりゃそうだと心の中で呟つぶやく。昨夜は遅くまで明  
かりがついていたし、どうせまた明け方まで飲んだ

くれていたんだろ。

というわけで、朝飯は自分の分だけを用意した。

昨夜の残りの冷や飯に卵で溶いた納豆を乗せる。

つけ合わせはもぎたての曲がり胡瓜きゅうりだ。これに手製

の甘味噌あまみそをつけて囓かじる。

パリッ……！

新鮮な菌ごたえ。みずみずしさが口いっぱい溢あふ  
れる。胡瓜の新鮮な青臭さと味噌のあまじよっぱさ  
が相まって――

「くうう……」

旨い。あまりの旨さにじたじた足踏みするシン  
である。穫りたて胡瓜は旨い。いや胡瓜だけじゃな  
い。摘つみたて青菜には独特の風味がある。釣ったば  
かりの川魚は臭みもなく、身は引き締まってぷりぷ  
りしている。新鮮な食材を食する贅沢。それは都暮  
らしでは絶対に味わえない喜びのひとつだった。

朝食が終わると、次に待っているのは畑仕事だ。  
竹笠を被り、箆かぶを持って屋敷の裏手にある畑に出る。

雑草を取り、水を撒き、程よく実った茄子を収穫する。濃紺色につやつやと輝く茄子をひとつひとつ丁寧に洗いながら、今夜は茄子の味噌炒めにしようと思心に決めた。

昇り始めた太陽がじりじりと肌を灼く。

シンは手ぬぐいで汗を拭った。見上げれば雲一つない青い空。今日も暑くなりそうだ。

穂張月を迎え、ナナノ里にも本格的な夏が到来していた。棚田の稲はすくすくと伸び、夏風にさわさわと揺れている。水田に舞い降りた鴨が稲の間を泳ぎ回る。餌を求め、忙しく頭を上下させている。

キロキロキロ……

鳴いているのは蛙だ。

みいんみいん……

しよわしよわしよわ……

遠くの森で、近くの林で、蟬が鳴き競う。そして――

ちぢるちぢるっ！

ぎやるっ、ちぢぢるっ！

ぎやるるるるるっ！

けたたましく鳴くのは酷暑の可見である。その暑苦しさと言ったら、聞いているだけで汗が噴き出し、てくるほどだ。

午後は暑さを避けて、溪流に釣りをしに行こうか。西の山に山菜採りに行くのもいいな。そう思いながら畑仕事を終え、正午前に屋敷に戻った。

「お疲れさん」

「今日も暑いねえ」

「せいがですなあ」

屋敷の縁側には三人の婆様が腰掛けていた。ヌノガイにチカヤ、それにコシノだ。

「ほれ、土産だ」

そう言つて、ヌノガイは隣に置いてある籠を叩いた。籠の中には葱や山芋、青菜などがどっさり入

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。